定本

横光利一全集

定本

横光利一全集

第十六卷

江苏工业学院图书馆
藏书章

河出書房新社

定本 横光利一全集 第十六巻

昭和六十二年十二月十日 初版印刷
昭和六十二年十二月二十日 初版發行

著者 横光利一
校訂者 保昌正夫
井上謙
栗坪良樹
發行者 清水勝

發行所 株式會社 河出書房新社
東京都渋谷區千駄ケ谷二―三二―二
電話 四〇四―一二〇一（營業）
四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社
製本 小高製本工業株式會社
Printed in JAPAN
© 一九八七
ISBN4-309-60716-0

目

次

書翰……3
習作……362
夜の翅……362
第五學年修學旅行記……363
自序・自跋……367
「新興藝術派文學集」序……367
「書方草紙」序……369
「上海」序……370
「雅歌」序……371
「花花」序……372
「上海」序……373
「赤い着物」附記……373
「現代長篇小說全集　第九卷　横光利一篇」跋……374
「寢園」自序……374
「機械・他八篇」卷末に……375
「月夜」自序……376
上海再刊の序……377
「祕色」卷末に……378
「婦德」自序……379
「旅愁　第一篇」後記……379
「紋章」後記……381
「旅愁　第四篇」後記……382
「夜の靴」あとがき……382
序文・跋文……384

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「一番美しく」序……384
「聖家族」序……384
「月・水・金」跋……385
「青い手帖」序文にかへて……385
「貧時交」序……386
「長谷川春草句集」序……386
「鶴の眼」序……387
「野鴨は野鴨」序……388
「わが愛の記」序……388
「浪」序……389
「ちゝはゝの紋」跋……390
「剃刀日記」序……391
「花電車」序……391

推薦文……394

これにまさる全集はない……394
眞珠夫人について……394
文學を理解するには……395
日本文學に就いて……396
ジイド全集……396
天才詩人……397
直木三十五氏について……398
現代青年の心を表現……398
バルザック全集刊行……399
茶道の再認識……400
知識階級への救助……400
ジイド以後の道……401
この全集の價値……401

林芙美子氏……402
川端康成讃……402
林さんの作品……403
三代集について……403
精神の委員……404
「現代詩集」に寄す……404
源氏美の效用……405
「麥と兵隊について」……405
アンケート……406
雜纂……408
小説別稿……408
創作ノート……421
評論・隨筆……431
談話……494
古メリヤスを着せられた話……494
○……497
「記念祭」の監督……498
指導理論ありや……498
小泉信三著『日清戰爭と支那事變』を讀んで……499
覺書　科學に關して……501
横光利一氏は語る……503
補遺Ⅰ……505
『大正二年當用日記』……505

補遺Ⅱ

敵――水守氏へ
文壇波動調
文壇波動調
新鮮な贈物
外面リズムと里見弴氏
年齢戰と新リアリズム
電話と客觀　附　藤森君の批評眼
衣笠貞之助座談會
時には足で
識者の批判に見よ
自己より社會へ
「機械」序
最近の感想
うす馬鹿
濠
題未定
白梅
別離
尾崎士郎氏の文學
解題・編集ノート
年譜
書誌
書翰索引
題名索引

定本

横光利一全集

第十六巻

書翰

明治四十二年（一九〇九）

1　三月九日消印　上野桑町より澤井善一宛（葉書）

拜啓　お手紙をくださいましてまことにありがたうございます　もう三日の大試驗がすみましたなら一度たくへかへろーと思つてをります　それで歸へつたならばどうぞ一しょに遊んでください　また試驗の時には五年ゆーとーのせいせきで卒業してください以上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

大正四年（一九一五）

2　八月十九日消印　山科より三重縣名賀郡種生村大字種生
上嶋頼光宛（葉書・ペン書）

Rサン――長い御手紙有り難う。金比羅舟々御舟に帆かけてしゆらしゆしゆしゆとは徳平のそもことかハハ……。Rサン――相會する日の早や目前にせまつて來たのを先づ喜びましようよ、Rサン――土用もすんでしまつた。そして秋!! その秋はもう君と私と總ての、上に忍びよつて來ました。君よ試みに歌つてごらん、桐の一葉に風立ちてさしもに暑き夏の日も……。私の胸臆はもう悲哀、哀愁、憂愁の苦悶によつて攪亂されて參りました。そして私の眞實の理性てふものを高い高い（欠）な大空の中へ放してしまいました。R君――秋！ 秋！ こうした叫び（欠）限の意味深い悲しい物語り歌はれておるのを見もしませんか（欠）の語る桐!! 秋の象徴のコスモス!! 二年前の秋、それは（欠）ほこつた歡喜に滿ちた秋でした。それから私らの家であつた（欠）た若芽をふき出しました。そして三度目の今の秋!!（欠）低い、暗黑の中にさまよふ弱者の絶望の（欠）實に此様なものなのか、君よ、君、總ては此儘（欠）は君になげくより他總てに訴へるものはないのです（欠）風になびきましよう。コスモスもあの裏の少女の唇（欠）てふものか涼しい風に送られて來る。其の（欠）のでしようか。あゝ 御身大切に さような（欠）

大正五年（一九一六）

3　一月一日消印　京都府宇治郡山科村四ノ宮より三重縣名賀郡種生村大字種生　上嶋頼光宛（毛筆）

又美くしき春は芽をふきて
古き小さやかなる見地より又一歩
我れらは脱け出でん
新なる動揺めきに進み行かんと
意義ある光輝に浴しつ我れらは

4　三月　伊賀郡阿山郡上野忍町内金前川合方　上嶋頼光宛（毛筆）

寒いのにありがたう！
私は悲しかつた、柘植に來た時靈山には雪が削つた様に錐形に積つてゐた。私の首すぢへ霰が冷やかに罹つた、もう其時は夜だつた。
上野が戀しかつた、もう一度君が見たかつた！
君の眼が、うるんだ時私は顔をそむけざるを得なかつた。だるそうな電氣の下で君にもらつた敷島の紫色の煙を輪に呼ひた時、玉ちやんの星の様な瞳がぼんやりと思ひ出された
私のこうした悲哀な空氣に沈んでゐる中知らぬ間にもう大津の驛まで着てしまつてゐた。
御身大切に！　前の人に宜敷しく、Jにも。急ぎに手紙を出そう、

5　四月十三日消印　東京府下戸塚村下戸塚村榮進館内より三重縣伊賀國阿山郡上野忍町川合義男方　上嶋頼光宛（ペン書）

長らく御無沙汰ほんとうに許して呉れ給へ東京へ來たがしかし私の豫記と大なる齟齬があつたのでした
私は東京は嫌ひと云ふよりむしろ恐ろしくなりました
（玉ちゃんに宜しくそして川合義男様にも）こんな所へは來るものぢやありませんよ　でも早稲田の空氣は宜さそうです　本日（十二日）始業式がありました　隈伯を見ました　寫眞で見るより偉大だずつと。それは云ひ得ないよ
此頃は意張つてゐるんだろう　新入生は可愛いかい？
インチをよつてベケ食ふなよ俺みたいな目に會ふぞ　もうぢき旅行でお樂しみだの。あのジュウエル君はどうしてゐる？　ビシのことを山岡から聞きやがつて俺に怒つてきやがつたよ　俺や何て云つてよいのか知らんわい。
「ヘヘン　エロウスマンノヤケド、オ前サンよりお先きどつせて。うそ〳〵〳〵　隅田川の堤のあたりを遊びに行つたときビシにそつくりなガールがの　可愛い江戸ツコをつがつて遊んでゐるのさ　俺やもうたまらなくなつて　ポロ〳〵とほんとに來たよ　何と云つても the first love…は忘れられん　あゝ馬鹿なことを云つたの失敬許して呉れ給へ、あの高尾サンがの俺様に荷物を送つてくれて禮を云つてをいて呉れ給へ　そしてその金を君から甘くかけて云はせて呉れ、俺が高尾に聞いても多分云はないだろうから。しかし今お送りしないかもしれない　六月に入れば直ぐ休暇になるからきつと行く。いや君らが來てくれてもいい、此の間はうまいこと謔を云ひなしたありがたう。

6　五月三十一日消印　東京より三重縣伊賀國阿山郡上野中學校內五學年生　上嶋賴光宛（葉書・ペン書）

U兄！　ほんとうに失敬したね赦して呉れ給へ、三角は怒りよるかい校長が壓制するとかけしからんのう、いつか猫の皮を脱ぐだろうと思つてゐたが又ぞろ、やり出したな相變らず高尾と兄とは暢氣にしてゐるだろう、うらやましいな、やすみには兄の下宿でとめてもらふぞ、宿賃はいくら高くてもかまはんが俺の家へは是非來たまへ、今度はうそをつかんとな、兄は一寸も手紙を呉れぬな、兄もズイブン俺に負けんズボ君とは承知してゐないこともないがしかし。怒つてゐるのかい。旅行は面白かつたか。俺は此の頃淋しうてならぬ、運動は少度もしない、市へも出ない、何んだか恐ろしい樣な氣持ちがしてならぬもの。家の中に居て硝子を透ほして、あの青葉青葉の銀色の吐息が大氣の中へ放散して溶けこむでゐるのを眺めてゐる、そして夏が來た、と云ふ生々した心持ちを味つてゐる。だけど美てうことは忘れられぬ。愛と云ふことも忘れられぬ。私の內的生命には不斷の力が漲つてゐる。私は女のことも思ふ自己と云ふことも思ふ。私は生きてゐると思ふと何となしに嬉しい、だから餘り嬉しすぎて時々悲觀する。そは生てふことについて悲觀する。そして時々、自殺と云ふことを考へ出す。餘り自己を愛する心が膨大するから自殺を思ふ。死と云ふことは如何なることであるか。又如何なることを俺にもたらすかと云ふことは俺は知らん。しかし、生と死との別は云へないが判つてゐる。何だか、此頃は、おど〳〵として少も落付きがなくなつて來た。危險な時であるとは知つてゐるが、どうすることも出來ん。弱いのでもあろう。しかし別に氣にかけたくない

だから俺は自殺てふことをそれ程恐いことであるとは思はれぬ

俺の見たる人生に於て壓迫と云ふことは第一の敵である、俺は壓迫に對して、女郎の樣にぢつと忍從する程弱くはない往々、俗人が、忍從せ忍從せと叫ぶが、一體誰のために云ふんだ？　もし眞實に自分のために思つて呉れるならば……いやもう云ふまい。

そんな親切な奴が親の他に何處にあろう。人生はそれ程、すさびはてゝゐる。俺の出た、兄の今居る學校は此の壓迫の製造所であつた。俺の眼からは、實朝の斷末の樣な涙がポタリ〳〵と流れる。さようなら

7　七月十五日消印　京都府下山科四之宮より三重縣伊賀郡
阿山郡上野町東忍町新方裏　上嶋賴光宛（ペン書）

私はね、それは〳〵非常に嬉しく感じましたよ、そうしてね、あのお別れする時に、それ丈悲しくあつたのでした、また兄が私の家へ來たら會へるからと思つて見ても矢張り一種の哀愁を覺えました。ほんとうに來るんだぜ。私は家の者にその樣に云つてをいたからなア、さア行くと、なると何だか都合が惡くつて中々行けないものだよ、しかし、何も考へずに唯、行け〳〵と思つて來るんだ金なんか入るか。大津迄來たなら　何日何時に乘ると云つたら迎ひに行くよ、ほんとうに來て呉れ待つてゐるよ、高尾とね　もう試驗だなア。しつかりやるんだよ。ほんとうに試驗前にすまなかつた。いい成績で出たまへ、私らには何もかかわりがないが　兄らにはあるよ。あの人はよい成績で出たげなと云はれる丈でも確かに嬉しい樣な氣がするさ。しかしこんなことを氣にかけてゐた日にや駄目だが。何でもいい、來て呉れ。それは〳〵甘い御馳走をするからハハ……。スモ、が赤う色付いてゐた。何日だつたか兄のゐる室で私の顏を見てビシが赤くなつた時の樣だ。ハハ……。いいや笑はないでをこう。ニガ笑ひかもしれんてさ。白歩曰く「汝よ勉強して來れ」と。

8　大正五年（推定）八月九日　京都府宇治郡山科村四ノ宮より三重縣阿山郡種生村大字種生　上嶋賴光宛（宛名毛筆、本文ペン書）

Rサンー、御氣嫌よう、でもまあ御健全で何より結講至極にこざります。

まあ第一に此う堅うなつて御挨拶を申しあげなくては君様に對して罰があたりますからな、

Rサンー　此處でも聞いたよ。昔丹波の大江山……。つて、そして君のことが其時事に波の様に起つて來てね仕方がない、一度位い手紙をくれさ、なんぼ、さかな許ツりつつてゐたと云ふても、餘りと云へば言語同斷、一刀の下に切りふせてくれなんず覺悟に及べッ――――、之れは失敬千萬、かたぢけない　とこうまあ、云はしてをいてくれ　その中にはお日さんも笑はつしやるからな。もうむずかしい小理屈ならべるよりは此方が面白うてな、はあ、まあ　どうやらこうやら一學期も洗濯が出來まして……とは隣りの、おかみさんの言ふたこと。俺には一枚も一學期には洗濯が出來ません、それどころか戎サマまでが悪いことなさいますので、どうにも、こうにも、てんと、手のつけ様がありません、……

これは、したり、なんたることど、此の様はッ……と怒りなされた檀那サマ。これは戎サマがなさいました、私はしやしません　と尻をまくつて飛んで逃げる。三十八計逃ぐるにしかず、どんどん尻に帆かけて山科まで……。やつと待つた大石どの毎日〳〵、おかると一所に遊ぶが油斷。

Rサン、さかな何匹つりました。俺におくつてくれ給へ、葉書に荒縄でしばりつけてさ。これは雜談。Rサン、御勉強でしよう、來學期、こうした叫びの中からは云ひ知れぬ輝きを漲らしてをります　そして思ふ様私らは　美妙な音樂の様な美しい色彩ある生活ををくりましようよさようなら。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.